

大別する場合はそれに取め難い題目もあらわれるばかりでなく、檢字表などが頗る複雑したものとなる。したがつてそれらも長短があり、何れを可とするか、却つて議論が多いかも知れない。幸に続編も編纂中のことといわれるから、その際かかる問題について實際的な意見を示していただき度いものである。

(発行者 日本學術振興會、発売所 丸善株式會社 定価千円) — 小野勝年 —

アイリオン・パウア著
三好洋子訳

中世に生きる人々

中世がルネサンス的・啓蒙主義的な偏見の彼方から掘り出されてより、すでにかなりの日子が経つた。中世にも平凡な、だが多様な民衆の生活があつたということは、自明なこ

とだが、今日ほどに共感を呼んでいるときもない。今世紀における中世社会経済史の画期的な發展がこれに寄与するものであつたことは、いふまでもないことであるが、また一方社会發展法則への熾烈な関心が、ともすればそこに動いた人間を化石化した傾向も蔽いえなかつた。元來究極においては、眞の人間復興にこそ参与すべきものであつた社会経済史学が、固々な概念と事實の凝結に陥るとき——

その懸念あるとき、私は問題なく、このアイリオン・パウアの一書をおすすめする。故パウア女史は人も知る英国社会経済史学界の泰斗、その不朽の業績については簡單には訳者の「あとがき」を参照せられたい。しかしなによりも本書において魅惑的なものは、このような研究業績の背景の上に立つて、人目につかない中世民衆——農民ボド、マルコ・ポーロ、尼僧院長マダム・エグランティーン、

パリの一主婦メナジエの妻、ステープル商人トマス・ペトソン、ある織元トマス・ペイック——の生活の諸相を円熟した筆に上せている点にある。読者は広汎な社会史的背景の中に、しかし、動いている、感情をもつた人間像に接することができるとだ。しかも女性特有の繊細な洞察眼は女性を描いてますますさえていふように思われる。ともあれ、名もなき人間と国土への愛着は、厳密な史料によつた本書の叙述をくるむ芳香だ。

さて、埋草のすざびにまかせ、あらずもがな言葉の連ねたが、これも一つは、この古典的名著をふたたび、われわれに近づけてくれた訳者三好氏に対する敬意からに外ならぬ。事實、訳しにくいふしもある本書を流麗な訳文にこなされた訳者の労を多としたい。〔原著名 Elison Power, Medieval People, 1924 (18) 東京大学出版會 定価二四〇円〕

— 越智武臣 —